

## 近代日本における煩悶青年の系譜

——相馬御風の『還元録』をめぐる——

加藤 潤

### The Transition of Anguished Youth in the Course of Japanese Modernization.

— A critical study of *Kangenroku* by Soma Gyofu —

Jun KATO

#### 1：序

「われわれは、われわれ自身に所属すると同時に、世界にも所属しているのである。われわれの内側には、われわれの活動をひきおこすわれわれ自身の個人的な自我のほかに、なにものかが存在する。」<sup>1)</sup>

いうまでもなく、ティリアキンのこの言葉は、社会学者エミール・デュルケムが終生のテーマとした、個人と社会との相互存在性のことをいったものである。すなわち、個人の存在は、他の何者にも替えられない独自のものであることは疑う余地もない事実であるが、それと同時に、一個人は常に社会的事実を内面に転化し、それを表象しているのである。ティリアキンがいう「なにものか」とは、個人が意図するとせざるとにかかわらず自らの行為に反映させているところの「集合意識」のことなのである。したがって、ある個人の行為は、社会集団の流れのなかに置いてはじめて理解しうるものであるし、逆に「社会状況」とは、多くの個人の行動から抽出される、ある方向性をもった現象のことである。

こうした社会と個人との相互関係は、個人があくまで一生を通じて外界となんらかの関わりをもちながら生きていく存在である以上、どの人生段階でも、またはどんな社会状況においても生じるといわねばなるまい。そうだとすれば、ある価値観をもった時代状況を明らかにするには、そこに生きる個人の自我に共通する傾向を見出す以外に方法はあるまい。とりわけ、その時代状況が、特定のイデオロギーや社会体制によって名義を与えられていない場合、われわれは、個人の行動と思想を一つずつ追い求め、そこから新たな価値地図を描くしかない。

本論で試みようとするのは、明治後期から大正前期にかけて、わが国の近代化後期を生き、相馬御風という一人の批評家の内面をたどることにより、そこに、ある時代の価値状況を見い出そうというものである。

ところで、これまでの分析では、明治後期のインテリ青年層に蔓延していく煩悶文化ともいえるべき態度が、前世代の目にどのように映ったのか、その点を当時の世論から明らかにしてきた。<sup>2)</sup>そこで展開された議論は、青年層の心理が国家から遊離していき、ひいては国家統合の危機を招くという警鐘であった。しかしながら、その一方では、目標を喪失した青年層の心理状態を生んだ原因は、明治国家自体の目標が曖昧になっている状況(時代精神)と、精緻化する社会制度(教育制度、職業構造)の中でかつてのような乱世的立身出世の道を閉ざされた青年たちの閉塞感にあるという、いわば煩悶青年擁護論ともいえるべき主張が提出されていることを見逃してはならない。さて、次なる課題はこうした分析結果を踏まえ、当時の青年

自身の行動と思想に立ち入り、そこに時代と個人との相互関係を検証することであるが、本論では、その一ステップとして、批評家相馬御風(明治16年生～昭和25年没)の思想と人生态度に、煩悶青年の内面をかいまみることにしよう。だが、断っておきたいのだが、この方法は心理学的な成育歴やパソロジーの構築を目指してはいないという点である。あくまでも本論が照準を定めているのは個人と社会状況との相互浸透作用を明らかにすることである。これまで、心理学、文学の領域では、そこから生まれた作品、行動、思想さらに病理さえ、それらを個人の資質に帰因させる傾向が強かったように思われる。しかし、近代的自我の出現とその行方がある社会において検証しようとするとき、社会状況は個人の内面に深く浸透しているといわねばならない。なぜなら、近代化とはまさに、近代という価値規範の中に個人を定型化する過程に他ならないからである。

## 2：煩悶青年としての御風

御風年譜を一覧すると、彼の青年期までの歩みが明治煩悶青年の典型と極めてよく符号することが解る。その典型とは、次のような共通点を有していることで定義することができる。

- 1) 明治15年前後から明治20年前後に生まれた明治第二世代であること。
- 2) 中等教育以上の教育を受けているインテリ青年であること。
- 3) 学校教育期間で文学もしくは哲学に接触し、少なからず傾倒していること。

これらの3点は、それぞれが煩悶青年を形成する要因となっている。まず、共通点1)は、この世代が、明治国家の黎明期と動乱期を経験していないことを意味する。すなわち、明治維新前後を青年期のうちに迎えた世代にとっては、個人のあらゆる価値と行動は、国家統合という目標に収斂していくのに対して、この世代は、我が国が近代化の当初の目標を一応達成した明治後期、とりわけ日露戦争以後の目標喪失状態にあった社会状況の影響を青年期のただ中に受けているのである。次に共通点2)であるが、この点については、今後、地方の農村青年または学校教育外にあった職業青年たちの価値観が明らかにされるのを待たなければならないが、少なくとも、煩悶という「自分さがし」の時間を十分に享受できたのは、モラトリアム期を社会的に保障された、学校教育期間にある青年層に限られると仮定してもよいのではないか。最後に第3の共通点については、よく指摘されているように、煩悶青年の思想的基盤が、外来の哲学(ニーチェ、ショーペンハウエル)とロシア文学(ツルゲーネフ、トルストイ)、さらにそれが日本の文学風土に定着して生まれたわが国の自然主義文学にあったことを確認しておくことで十分だろう。

さて、御風年譜にしたがって、青年期までの歩みを粗描しておこう<sup>3)</sup>。

相馬御風は、明治16年、現在の新潟県魚川市に、父徳治郎、母チヨの長男として生まれた。相馬家は代々社寺建築をなりわいとし、江戸時代より苗子帯刀を許されていた。しかし、父徳治郎の代になって、彼は家業を廃し、地方行政に力を入れるようになった。ちなみに徳次郎は糸魚川町長に就いている。御風自身は、明治29年3月糸魚川高等小学校を修業し、翌4月には高田中学校(現在の上越市)に入学した。ここで、彼は俳句に親しむようになる。その入れ込みようは、在京の俳句内藤鳴雪に添削を乞うていることからもうかがえる。

さらに、中学4年ごろ、国語教師で歌人であった下村干別について短歌を学び始めている。続く明治33年、18歳の時、佐々木信綱の主宰する「竹柏会」に入会する一方、雑誌「新声」にも短歌を投稿している。彼が「御風」という雅号を使いだしたのはこの頃である。こうして、

明治煩悶青年の通過儀礼ともいうべく、文学への耽溺を深めた中学時代の御風であったが、卒業後は、官立大学へ進み、建築学を修めて家業を再興させたいという父の意向に従うしかなかった。明治34年春卒業と同時に、第三高等学校受験準備のため、彼は京都に滞在することになった。しかし、彼は7月の入学試験を前にして、受験勉強に専念するどころか、与謝野鉄幹主宰の新詩社に入会し、詩歌の指導を受け、自らの作品を「明星」に発表したりしている。当然のことながら、三高の入学試験は失敗に終わった。すでに御風は入試に心なく、いっそう詩歌に心酔していくのである。その後一年間は、上京と旅を重ねながら創作を続け、翌明治35年9月東京専門学校予科に入学を許可されている。その後、明治37年、専門学校令によって認可され改称された早稲田大学在学中の御風の活動にはめざましいものがある<sup>4)</sup>。入学直後、21歳の御風は、前田林外、岩野泡鳴等と共に総合文芸雑誌「白百合」を刊行した。この浪漫主義的雑誌は以来、明治40年まで42冊を出して廃刊となる。早稲田時代から、彼の20代が終わるまでの文論壇での活躍は紙幅に余るものがある。だが、なんとといっても彼の20代の創作活動の起点となったのは、明治39年、早稲田卒業と同時に、前年英国留学から帰朝した島村抱月等によって再刊された第二次「早稲田文学」の編集元である早稲田文学社に入ったことだろう。彼は勤務のかたわら、次々と論文、創作を寄稿し、そこではいわば、早稲田関係者を中心とした文壇サークルの寵児的存在であった。

こうして急速に自然主義作家としての地位を確固たるものにしていった御風が、大正5年3月、約10年間の文筆活動に突如ピリオドを打ち、郷里糸井川に隠棲してしまった。以後、彼は、大正7年に一度、島村抱月の葬儀に上京したのを除いて、東京の地を踏むことはなかった。郷里での御風は、良寛研究に専念するかたわら、自らによる自らの為の個人誌「野を歩む者」を編むことを、亡くなる昭和25年まで続けた。

この、「脱俗」ともいえる彼の翻身について、御風自身がその心境を綴ったのが、後述する『還元録』である。『還元録』は糸魚川への転居を前にした、大正5年2月春陽堂から刊行されている。その筆致からすると、精神的に行き詰まったうえでの奇挙というより、むしろ、彼にとっての機が熟し、至るべくして至ったひとつの境地といった感がつよい。すなわち、彼の隠棲の動機は、自己の価値観と実生活との乖離を単純に整理したという微視的、短期的な解釈<sup>5)</sup>では掬い取れず、むしろ見方を拡大して、御風の中で青年期を通じて少しずつ芽生えてきた「純粹自我」もしくは「私的精神世界」とでもいうような境地への希求が、現実的行動としては、公的生活の清算という形であらわれたと考えるのが妥当だろう。ではいったい、華々しい活躍をした御風の20代を通じて脈づきつつ、彼の中で膨らんでいった「境地」とはいかなるものなのだろうか。その前にまず、『還元録』の評価をめぐって、本論での位置づけを明確にしておきたい。

### 3：『還元録』をめぐって

御風が求めていたものは、芸術としての文芸批評の確立でもなければ、自らの批評眼の練磨でもなかった。なによりも彼の常に抱えていた課題は、なぜ生きるのか(why)という答うべくもない抽象的な煩悶なのであった。あらゆる彼の批評活動が自然主義作家相馬御風の名声を高めると同時に、彼の内面には自らが煩悶から遠のいていくことに対する忸怩たる思いが堆積していったのではないだろうか。この管見を御風自身の言葉で裏付けてみよう。

文壇からの退却を前にした御風は、自然主義作家として送った自らの青年期を振り返って、

こういつている。

「即ち私にはあの頃に於ける文芸上の所謂自然主義の主張が、最も安全な、そして最も容易な思想統一の方針であった。かくして私は文芸界の末席にあって肩を怒らしながら物を云う一個の自然主義主張者としての一青年評論家となったのである。」<sup>6)</sup>

この自嘲気味の告白は、彼が『還元録』の中で自己卑下する際に頻用する「罪悪」という言葉の背景を説明している。つまり、彼の価値観には、ひとつに、自己の煩悶に対して忠実でありたいという求道的な方向性があり、いまひとつには、文学界の新星としての期待に応え、名声を得ることにより確固たる社会的地位を獲得しようとする欲求があったということである。そして、二つの背反する価値を統合するために彼がとった方法は、文学と実人生とを一致させることであった。そのように考えると、彼の突然の隠棲について谷沢永一が示している独特の解釈<sup>7)</sup>もあながち奇を衒ったものとはいえない。谷沢の見解とはこのようなものである。

「この頭のなかだけでの出口のない過程で、自己批評の真実性を検証する目盛りとして、自己のうちなる劣悪部分の指摘と計上に没頭し、その自家中毒によって、自分のレゾンデートルを皆無と做す清算主義におちいり、理論的自己破産を申請するにいたった御風が思考態度の結実、これがわれとわが身を埋葬するに似た『還元録』の決意となってあらわれたとみることは、思いすごしであろうか。」<sup>8)</sup>

さらに矢沢の慧眼は、批評家としての御風が「文学理論をすべて作家態度の問題に還元し、作家態度はすなわち個人の生き方のことであると等視」<sup>9)</sup>するという短絡的な方法論に心酔していることを見抜いている。その意味でいえば確かに、「問題を文学から社会問題に転移することによって御風は、ここに人間生活の諸問題についての意欲的な批評を仕事の中心とすることになり、文学独自の問題を文学の次元において扱おうとする態度は、これ以後（正宗白鳥論以後：筆者）の御風に絶えて見られなくなるのである。」<sup>10)</sup>

しかしながら、矢沢の卓見には、文学論とりわけ作家論につきまとう陥穽が潜んでいるように思われる。それは先述したように、ある作家または作品を論ずる場合、そこから生まれる感性、価値等を個人の資質に帰してしまうという文学的方法のことである。いま、作家論が浮彫りにした御風像を離れて全く別の視座をとることにより、隠棲という彼の「転向」を、興味深い「社会現像」あるいは「世代現像」として見直すことはできないだろうか<sup>11)</sup>。仮に、御風を前節で定義したような煩悶青年世代とみなせば、彼の批評活動が芸術の追求や自然主義文学の興隆を目指したものではないことはおのずと理解できよう。さらに、煩悶世代が国家目標やイデオロギーから遊離し、私的な世界で自己の閉鎖系を形成する傾向にあることを今一度思い起こしてみると、御風が求めていたものは、近代的自我の発見という、あたかも逃げ水のような目標であり、文学者御風の社会的地位とは抵触する性質の課題であったと仮定できよう。彼にとっての転向は両者を統合する術なのであり、文学者としての劣化や現実逃避ではなかったはずである。ただ、隠棲という方法を選んだ御風的心情には、出家や行乞といった、無常観を動機とする求道的・逃避的人生態度のイメージも混ざり合っていたことは、後年の生き様が物語っている。

さらに敷衍すれば、文芸批評から社会批評、人生論へ、という彼の文学上の「転向」は、煩悶世代としての御風の本来の価値軸に立ち戻ったと見直すことができる。この点についてさらにつけ加えると、同じ煩悶世代の最後に位置する和辻哲郎（明治22年生まれ）はのちに、大正前期の煩悶青年に対する批判的な世論に異議を唱え、青年のアノミックな心理状況を、価値の中心を失った社会構造（時代精神）に帰因させることによって擁護しているが、このことは、

和辻が哲学という領域にあり、イデオロギーやジャーナリズムから比較的自由的な立場の中で青年期以降を歩んだことから、御風のように自然主義という教義に拘束されるのを免れ、名声と煩悶の間で引き裂かれた自己の決裁を迫られるという状況に至らなかったという点での相違であり、両者の価値意識は同じ基底をもつものといえる。

さて、『還元録』の中身に戻ることにしよう。冒頭で、自然主義作家としての自己の欺瞞を告白した御風は、次第に煩悶青年の態度を思い出したかのように私的世界に沈んでいく。それは、20代でいったん発見したかと思われた、イデオロギー内での一時的な自己像が崩壊していく過程でもあった。そして、こう慨嘆する。

「徒らに芸術の為めとか、世の中の為めとか云うやうな美名の下に、幾つとなく犯して来たこの私の過去の罪悪から、どうして私は救はれるのか。一体今日の私は何をしたらよいのか。」<sup>12)</sup>

自虐的な告白によって、過去の自己決裁を自身に迫った御風だったが、いままでの自己にとって替わる自己の再定義はまだ生まれるべくもなかった。したがって、彼の心理的拡散は募るばかりである。

「『何も解らない。何事も解らない。』それは過去もさうであったし、現在もさうである。『私には何一つ解って居ない。』」<sup>13)</sup>

そして、出口のない心理的拡散に対して御風が出した決裁方法が、ほかでもない、『還元録』という性急なまでの自己変革宣言そのものであった。おそらく彼は、ともかく自分に新たなライフ・スタイルを強いることによって、しばらくの猶予期間（モラトリアム）を得て、もう一度自己模索を始めようと考えていたのだろう。それほどまでに彼が焦燥感にとらわれていたことは、「今や、私には本当に何とかしなくては居られぬ時が来たのだ」<sup>14)</sup>という言葉に表れている。

このように考えてみると、御風の翻身と文学上の転向とは、彼の人生という軸上に置いてみれば不連続面をなすものではなく、さらにそれを社会心理学的概念を使ってみれば、アイデンティティの確立にむけての役割実験の過程であったといえる。この点についてはさらに一考を加えてみたい。

#### 4：アイデンティティー拡散から隠棲へ

ここでは、『還元録』出版に至るまでの御風がいかなるアイデンティティ形成の過程を踏んでいったのかに着目して、彼の青年期の足跡を概念的に辿ってみたい。

社会心理学者のE・エリクソンは、産業化と学校教育の長期化に伴って近代社会に生まれた「青年期」という曖昧な時期に、アイデンティティの確立（自分らしさの発見）という課題を与えることによって、ライフ・サイクルの中に位置づける理論的作業を行った。彼によればアイデンティティの確立とは、ひとつには、これまで生きてきた自己とこれから生きていこうとする自己とが連続性（または一貫性）をもつこと、いまひとつには、自らの生き方と価値観が所属する社会、文化の中で受認されているという感覚をもつこと、この2つの要素が必要になるという。<sup>15)</sup> この抽象的な課題を現実の社会的役割の中で達成するため、様々な試行錯誤、役割実験をおこなう準備段階として生じたのが近代の青年期なのである。実は、エリクソン自身も青年期に7年間にも渡る彷徨を経験している。彼は自らが味わった自分さがしという孤独な作業を近代青年の課題として理論化したのである。したがって、エリクソンと時期はことなるが、

まさにわが国の近代化過程の中で青年期を過ごした御風の行動と思想をアイデンティティ概念でもって再考してみることは、恣意的な類推ではない。

先に紹介した御風年譜でも解るとおり、早稲田時代からすでになかば文壇生活に入っていた御風には、自己模索や役割実験の時期がすっぽりと欠落しているとはいえないだろうか。にもかかわらず、彼には社会的役割と期待がかけられ、それに応えていくことによって、[見られている自己]の輪郭を明確にしていったのだった。先の引用を繰り返せば、自然主義という文学的イデオロギーが彼にとって「最も容易な思想統一の方針であった」のだが、このことはエリクソンも指摘しているように、強いイデオロギーに自らを同一化することによってアイデンティティの危機を回避し、疑似的なアイデンティティにより早期自己完結をするという、青年期にはしばしば起こる行動様式とみなせる。つまり、自己内部での自己評価、価値の統合を自らで模索することなく、「成人であることのもっとも重要な特徴、つまり社会の制度的構造への『統合』」<sup>16)</sup>が早期に完結してしまったのである。ということは、少なくともエリクソンのアイデンティティ概念をモデルに取る場合、御風は青年期の危機と統合を逆の経路で経験することになるのである。つまり、一時的なアイデンティティ感覚はいつか、主体的な自己定義にとって替わる必要があり、その時までモラトリアムは延長されるのである。

御風が『還元録』の中で使う「罪」という言葉は、他者と社会にたいしての罪悪感ではなく、自らの煩悶に対する忸怩たる思いであり、ある意味では自慰的でさえある。そうした思いを御風は『還元録』を書くかなり以前からもっており、若き自然主義批評家としての社会的名声と裏腹に彼自身の中では常に、一貫した自己定義を持たない未熟さに苦悩していたようだ。明治43年、御風は「吾等青年の行くべき道」と題する随筆を雑誌『文章世界』に寄せているが、その中で、ジャーナリズムの世界に根を下ろすことのできない自分への焦燥感を吐露している。

「一日として頭のからりとした、胸の晴々とした日はない。一日として同一な思想なり感情なりをしかと握って居る日がない。こんな状態に居る日がない。こんな状態に居る日がない。こんな状態に居る吾々にどうして此れから行くべき道などが見えよう。」<sup>17)</sup>

どれだけ文筆活動を積み重ねても、それが彼の自我を明確にしてくれることはなく、むしろ彼の内面にはいっそう空洞が膨らんでいったのだろう。そして、こう自虐する。

「まだ三十にもならぬ生若い青二才の分際で、やれ人生がどうの、やれ社会がどうの、やれ苦悶がどうのと、傍若無人の態度で小やかましい談議を人前わいわいやって、それで辛うじてその日を送って居ると云ふのは、何たる何たる浅ましい事だらう。」<sup>18)</sup>

このアイデンティティ拡散状況からの位相転換は、エリクソンが描く理想型にしたがえば、今一度自己と社会的役割との距離を調整し、社会的自我と個我とのバランスをとりながら統合(synthesis)することだろう。しかしながら、御風は逆に、徹底して他者との関わりを絶つことによって、いわば否定的な自己(カウンター・アイデンティティ)を確立しようとした。まず彼は、それまで自らが所属し、他者からもそう位置づけられてきた「知識人階級」なるものに批判の矢を向ける。自然主義という近代リアリズムを武器に批評活動をおこなってきた彼が、反近代主義、アンチ・インテレクチュアリズムともいべき正反対の立場に翻身したのである。知識人としての自己の位置を見つけられなくなった御風は、無学無知な市井人の生活に、ある手ごたえを感じた。さらに一步踏み込めば、そこへ退却しようとしたのかもしれない。

彼の知識人批判をみてみよう。

「所謂知識階級の人達に云はせれば、彼等(大衆：筆者)は無自覚な者共であり、謂

ふところの衆愚であり、無学者である。併しその所謂無自覚な、無学な生活のうちに、何といふ強さがあり、何といふ平安があり、何と云ふ情愛があることだろう…中略…けれども所謂知識ある人々、所謂自覚せる人々、所謂進歩せる人々は、多く之を見ない。自分達の生活が如何に苦しいものであり、如何に不自然なものであるかと知りつつも、なほ彼等無自覚者流を卑下して居る。」<sup>19)</sup>

では、近代人の生き方を不自然だと喝破する御風が見つけた境地とはいかなるものだったのだろうか。

## 5：自己愛的煩悶から実人生へ

『還元録』に先立つこと7年余り、先に引用した「吾等青年の行くべき道」(明治43年)の中で、御風はすでに隠棲への願望をほのめかしている。

「いっそ何もかも打ち捨てて自分を生んで呉れた田舎へ帰って、先祖代々から譲り受けた猫の額程の土地でも耕そう……中略……こんな分けのわからぬ仕事でその日その日を送って居るよりも今のうちに覚悟を決めて、自分から身を引いてしまった方がましだ。」<sup>20)</sup> というのである。

この時期から『還元録』をはさんだ御風の後半生、彼の筆は私的な世界に向かっていく。そのことを彼の文体の変化に見透かした浅見淵の言葉を借りてみよう。

「隠棲以後の文章は、一人よがりの上に、甘くなって読むに耐えぬ。奇妙にも、ジャーナリズムの渦中にあった時の文章だけが生きている。」<sup>21)</sup>

しかし、御風の甘さはとりもなおさず、彼が詩人でもなければ批評家でもなく、最後まで、一煩悶青年として生きることに執着したことの証ではないだろうか。ただそれだけに、あれほどにも名声に対しては禁欲的な態度を自らに強いたにもかかわらず、自らの感傷にはとめどもなく甘かったのである。この傾向は『還元録』に至ると、自己憐憫ともいべき様相を呈してくる<sup>22)</sup>。確かに煩悶青年の態度には、一見厳しい生活態度としての禁欲と内省的世界での自己愛的感傷とが同居しているといえる。たとえば御風も、内省に惑溺する一方で、芸術至上主義や当時本能主義とも呼ばれていた快樂主義と与することをきっぱりと拒否している。

「ボードレエルやウェルレーンやさてはわが国の岩野泡鳴氏や吉井勇氏などのやうに

思い切って利根的の欲望の中へ全身を浸し込んで了ふ事は、僕などには到底出来ない」<sup>23)</sup>

むしろ、彼が好んだのは、自己の煩悶と憂鬱の中に沈んでいき、自虐的なまでに自分を卑下し嫌悪し尽くしたところに生まれるナルシスティックな「境地」なのであった。そんな「境地」を彼はツルゲーネフの人生を借りて語っている。

「彼が送った物うい、憂鬱な、さびしい、あの灰色な一生を思ふと、私はつくづくかの所謂観照の人の運命と云ったやうなものに付き纏うた一種の悲哀を感じさせられるのである。」<sup>24)</sup>

という御風の感想は一見、「観照的態度を本位とする近代芸術家の運命」<sup>25)</sup>を哀れみ、不幸と見ているようだが、実は、御風自身の代わり身としてツルゲーネフの人生を見ていたのである。そして、ツルゲーネフのような憂鬱から脱却すべく「観照的態度」を捨て、「実行の人」とらんと欲したのではないだろうか。なぜならば、もし虚無的な観照を至福の人生とみなしていたのなら、御風の煩悶は、ニヒリストとして、または完全な出家者として社会生活を捨てることで解決するはずである。ならば、『還元録』のような生活更新の宣言文は必要なくなるだ

ろうし、その後の、世俗と付かず離れずの距離を保ちながらの中途半端な後半生は何ら解決にはなっていないことになる。そこで御風は一步進んで、ある論理操作を行うことで、実生活の中に煩悶の答えを見つけたと感じたようだ。それというのは、彼の言葉でいう「why」から「how」への転化である。すなわち「芸術が人生に存する事を、単にWhy (何故に) の方からの考へると、兎角前に述べたやうな抽象論に終わる傾向がある。われわれは寧ろこれをHow (如何にして) の方面から観る方を先にしたい」<sup>26)</sup> という主張である。これは、自然主義という文学的方法論を論じた文章であるにもかかわらず、そこから引き出されるのは、作品と作者の実人生は一体であるという御風の人生論であり、そのことを自らの人生で実行しようとしたのが、あの突然の翻身であったと考えられる。

実人生を問題にした御風の念頭には、常に規範的な人間類型といったようなものがあり、そのためか文学作品に登場する人物でさえ類型にあてはめて批評するようになる。たとえば、正宗白鳥論の中で、彼の作品に登場する青年を「一はあまり人生の意義などと云ふものを考へない普通の人。一は、やや高等な教育を受け、相当な自意識の発達した所謂新しい時代の青年」といったように二分法的な分類をしている<sup>27)</sup>。もはや彼の批評眼は、近代人の生き方と反近代主義の間で揺れ動く御風自身の心理状況を光源として、あらゆる対象を識別するようになったのである。

さらに御風は、自身を同一化すべき実人生の人間類型モデルを作家の生き方の中に捜し始める。つまり、自然主義批評家としての顔を捨てようと内心決意しつつあった御風は、新たなる同一化対象を求めたのである。そのことは、彼の人物論を一見すればよく分かる。たとえば、透徹した眼をもって人間を描いたモーパッサンについては、「まだ人間の中に踏み込んだ観照の足を自己の中へ踏み入れるには間があった。彼は広く人間そのものの上に解剖刀を向けたが、まだ自己の上にそれを向ける程の勇氣はなかった。」<sup>28)</sup>と、自己懐疑志向の欠如を酷評している。その他にも、とくに明治40年代以降、御風は夥しい作家論を書いている。ツルゲーニェフ、アンドレーニェフ、正宗白鳥、小川未明、樋口一葉、北村透谷、永井荷風、マクス・スティルナー、ニーチェ、トルストイ等、枚挙にいとまない。だが、どの論も作家またはその思想自体が対象化し切れておらず、どうやら御風が作家論を手がけながら、それら作家の中に自らが同一化できる実人生を模索していたらしいことがうかがえる。そんな中で、御風が傾倒していったのがトルストイの生き方であった。くどいようだが、御風が傾倒したのは、あくまでトルストイの実人生に対する態度であって、決して人道主義という彼の思想ではなかった。

「私などはトルストイの説いた人類の幸福と云ふ言葉の内容そのものよりは、さう云ふ事を考えたり説いたりしながら、ますます孤独になり、ますます愛と云ふ心持と遠ざかって、しまひには謎のやうな荒野の死を逃げなければならないまでに立ち至ったトルストイその人の生活そのものに、より深くより痛切なる現実的的人生味を感ずるのである。」<sup>29)</sup>

さらに、御風は『還元録』の出版とほぼ同時に、「凡人生活の福音」なる随筆を発表しているが、ここでは、還元録に先立って生活の更新が予告される。その中で、トルストイからの影響が明言されている箇所がある。もはや、トルストイの言葉は御風にとっては、宗教的啓示にも似た響きをもっていたのだろう。

「トルストイのあの厳肅な教訓によって、歩一歩一個の人間としての破壊の淵に近づきつつある私自身の惨めな姿をハッキリと自らの眼に見る事の出来る私となった。私の精神生活には、一つの厳肅な転機が必要とせられた。」<sup>30)</sup>



では、トルストイから得られた教訓に基づく実人生とはいかなるものだろうか。その点に関して、御風は尽き詰めた定義を下していないように思われる。なにより、実感のある具体的生活レベルでのモデルを手に入れ、抽象的な煩悶から解放された彼にとっては、それ以上理論的精緻化を行う必要はなかったのだろう。結局は、当時の豊かなインテリ中産階級間の一種の流行でもあった田園生活または半農生活に帰着するのであった<sup>31)</sup>。

しかし、さらにその背景にはやはり、御風の反近代主義が流れている。つまり、概念的ない方をすれば、明治維新以後の近代化過程において、自我意識が青年層で高まってきたのにもかかわらず、制度化する学校教育、思想的・文学的イデオロギーによって個人が枠づけられるという疎外状況に対して、彼は異議申し立てを提出したのである<sup>32)</sup>。こうした、[近代-反近代]という単純な図式を個人の生き方に当てはめてしまえば、当然の帰結として、素朴な生活への回帰ということになり、まさに御風の決着はその境地にあった。ここにきて、あれほど弱々しく拘泥していた御風の論調には、力強い自信がこもるようになる。

「けれども今や私は本当に過去の一切を投げ捨てても好いと云ふ気になった。衆愚生活凡人生活の福音が、それほど力強く私を引きつけるのである。」<sup>33)</sup> (下線筆者)

最後に、もう一度整理しておこう。文学に関して早熟であったが故に、青年期の早い時期から社会的役割と名声を与えられ、一見完結したかに思えた御風の青年期は、潜在化したモラトリアム状態を引きずったままであり、ついには、青年期晩期に至って自己決裁を迫られることになった。そこで彼が選んだ立場は、かなり性急な反近代主義であり、それを具現化していると信じたトルストイの人生態度に自らを同一化していくことであった。

## 6：社会化される煩悶青年

先に本論では煩悶青年を一つの社会現象または世代現象として位置づけると述べ、その一つの事例として相馬御風の思想と態度を再検討してきた。この作業は継続的に拡大していくべきものであるが、一つの見通しとして、明治中期から後期にかけては「逸脱」とみなされていた煩悶世代の青年が、大正期にはいつて次第に自らを社会にコミットさせ、そこで煩悶世代ゆえに生み出された「文化」を形成していくことを指摘しておきたい。

丸山真男はかつて、心理的に国家から遊離し、私化していった煩悶青年たちの価値観が文学に反映され、我が国独特の「私小説」なるジャンルが成立したことを指摘した<sup>34)</sup>。彼によれば、「『世間』から逃走してマゾヒスティックな自己暴露にふける『煩悶青年』」<sup>35)</sup>が、自然主義文学が描く内向的な主人公ということになる。しかしながら、自然主義文学や漱石の『それから』に描かれている煩悶青年とは前世代によって客体化された青年であることから、その描写はあまりに概念化されており、告白としてのリアリティーを欠いた社会批評の感を免れない<sup>36)</sup>。ゆえに、題材としての煩悶青年を描いた明治後期の文学と煩悶青年自身による「私小説」の確立とは必ずしも連続性をもつものではないというべきだろう。もう一つ付け加えると、あくまで価値構造と社会構造の類型化に興味関心を限定していた丸山は、先の仮説を人物論や作品論と照合し、詳細な検証をする作業をしていない。一方、文学の領域ではどうかといえば、久米正雄の「心境小説論」<sup>37)</sup>以来連綿として重ねられてきた「私小説論争」<sup>38)</sup>においても、作品と社会構造との照合は主題にはなっていない。そこで、本論で試みた一文学者と時代状況とのかわりを一般化する上で今後重要な対象となる、「私小説」作家と煩悶青年との関係について若

干触れておきたい。

なかでも、御風と同世代のインテリであり、彼より濃厚な「遊民」的性格をもつ「白樺派」の作家に注目してみたい。白樺派についてはよく知られている文学論争がある<sup>39)</sup>。それは、雑誌「白樺」の刊行(明治43年)によって旗揚げされた白樺派の文学に対して、その中心的同人である武者小路、志賀、里見等の文学的態度に見られる、貴族的特権の保護下での自己陶醉と内向性に対して投げかけられた痛烈な批判と、それに対して、和辻哲郎等の煩悶同世代によってなされた擁護派との論争であった。和辻はその擁護論において、白樺派の態度には自然主義に見られるような、人間社会の濁悪の暴露や、旧弊からの解放を盾にした本能主義ではなく、自らの人生態度を律し、社会に理想を求めるといった禁欲的な人道主義が流れており、その点で、自己中心的というよりむしろ社会改革的な志向をもっていると主張している。実はここで、はからずも和辻は煩悶青年の特質をあらわしている。それが、先に相馬御風について指摘した、文学よりむしろ人生態度を重視する傾向であることはいままでもないだろう。

この白樺論争は単なる文学論争というより、広く大正教養主義を含めた新しい文化をめぐる論争なのではないだろうか。いい換えれば、新たな人間観、社会観を提出した煩悶世代と前世代との間に生じた「世代間葛藤」と考えることもできよう。ここまで敷衍することが妥当か否かはさらに検討が必要であるが、同様の視点を小田切秀雄が早くから示していることは特筆すべきである。彼の「大正教養主義評価」は次のようなものである。

「白樺派の自我が、具体的な社会との対決をとびこしいきなり人類と結びつこうとした弱さと共通点がある。この教養主義は、大正期の拡大された高校教育(旧制高校)の教養をひろげることに貢献した側面もあるが、……中略……今日主義的な自我は天皇制とその秩序にたいして民主主義的な要求や批評によってたたかう代わりに、教養によって肥大した自我意識に自足し、現実との和解、適応に能動的であった。」<sup>40)</sup>

確かに、大正教養主義者は世代的にも煩悶世代と同世代に属するし、小田切が指摘する「教養による肥大」のみならず、白樺派作家の特質である自己陶醉と内向性を共用している。たとえば、阿部次郎の『三太郎の日記』には次のような自序が添えられている。

「自分は自分の過去のために、小さい墓を建ててやるような心持でこの書を編集した。自分は自分の心から愛しかつ心から憎んでいる過去のために墓誌を書いてやりたい心持でいっぱいになっている。」<sup>41)</sup>

阿部のいう過去とは、一高時代に人生問題研究会に入り、藤村操の自殺に遭遇し、さらに20代を自己模索のうちに過ごした煩悶の自分史のことである。こうした人生態度は、岩波茂雄、倉田百三、中勘助など、その専攻、社会的活動を問わず共通しているということができ、その意味で、「世代現象」と考えることは少なからず妥当性を持つものであろう。大正期に高まった「人格主義」なる運動も、以上のような文脈から解釈すれば、煩悶世代による能動的な社会参加といえるだろう。

かつて、漱石や鴎外等の前世代作家によって格好の小説題材となった煩悶青年は、いまや彼らが閉じ籠もっていた甘美な自己愛的世界を、同世代サークルを価値共有母体とすることにより、文学的イデオロギーにまで高めていったのである。すなわち、明治後期には社会病理現象とみなされていた煩悶が、次第に学校文化、文学党派さらには教養主義という大衆文化への広がりを持ち、社会の中に浸透し、エスタブリッシュメントへと成長していったのである。そうならば、煩悶青年は社会的役割と自己との統合によってアイデンティティを獲得することができることになるだろう。つまり、社会機能的に言えば、煩悶青年の社会化が成功したことになる。

るし、彼等の主体性を基軸にしていけば、煩悶という文化が社会的認知を得たことにより、彷徨していたアイデンティティに居場所が与えられたということである。

このように再考してみると、彼ら白樺派の文学運動は、学習院出のおぼっちゃん的性格や旧制高校で局所的に出現したサブ・カルチャーといった個別的性格だけで片付けられるべきものではなく、しっかりと近代日本の社会変化の中で位置づけられるべきものであると考えたい。

## 7：むすび

本論では、わが国の近代化過程のなかで自らの青年期を過ごした相馬御風の思想を追うことで、いくつかの示唆がえられた。まず、これまでの世論を中心にして評価されてきた明治後期の煩悶青年自身の内面が、アイデンティティ概念を適用することで次第に明らかになってきた。すなわち、漱石や鴎外等が理念型として描いた病理的な近代青年を、その精神史に入ってみると、葛藤を抱えながらも自己確立に向けてステップを踏んでいく心理的過程が見えてきた。さらに、彼等にとって最終的な「自我統合期」ともいえる大正前期において、煩悶青年文化が文学、社会運動等として社会的認知を獲得していく過程が存在することが、仮説的ではあるが指摘された。

しかしながら、アイデンティティの危機に直面した我が国の煩悶青年には、抽象的な自己定義を突き詰めた上で社会的役割との接続点を見いだすという作業を回避し、自己愛的な夢想世界へと退却していったり、求道的な人生态度をとる傾向がみられたが、それが日本の文化風土とどのような関係があるのか、その点についての検討は今後に残された。御風が最終的に行き着いた結論である、実感のある生活への信仰は、わが国の青年がいかにして近代化を受容し、それを日本文化によって濾過していったのかを明らかにする鍵であろう。本論でも若干触れたが、この点を主題としてきた私小説論の系譜にはまだ多くの検討課題があるように思われる<sup>42)</sup>。

## [注 解]

- 1) ティリアキン著、田中義久訳『個人と社会』みすず書房、1971年、P. 76.
- 2) 拙稿「近代日本における青年の自我構造に関する一考察—明治後期の青年像：その2—」名古屋女子大学紀要、第36号、人文・社会編、1990年。
- 3) 御風年譜については、『相馬御風著作集』別巻2、名著刊行会、1981年、に依った。なお、以下の論中で使用する『還元録』の引用は、『御風著作集』第1巻からのものであり、それ以外の論文についても同著作集に依った。以下『著作集』と略す。
- 4) 明治40年早稲田大学創立二十五周年記念に際して校歌を募集したが、これというものがなく、窮した審査員の坪内逍遙、島村抱月が御風に白羽の矢を立てたことは、彼がいかに囑望されていたかを物語っている。
- 5) 還元録を正面から考察したものとしては、野崎守英「『還元録』をめぐる」『御風著者集』別巻2、所収があるが、従来の解釈を整理すれば、御風の翻身について次のような仮説が提出されている。
  - イ) 愛児の死亡という出来事をきっかけに、彼の私生活に亀裂が入り、それが広がっていき、ついには、公的生活の清算により私的生活を守るといった方法をとった。
  - ロ) 自然主義の退潮期にあって、ジャーナリズムの動きに敏感であった御風が自らの引き際を判断した。

- ハ) 大杉栄ら社会主義者に近づいていった御風が、そのことの危険性を察知し、敬遠する方策として隠棲を選んだ。
- 6) 『還元録』 p. 9.
  - 7) 谷沢永一「相馬御風」『大正期の文芸評論』1967年, 塙書房. 本論では中公文庫版, 1988年を使用した.
  - 8) 谷沢, 同上書, p. 84.
  - 9) 同上書, p. 66.
  - 10) 同上書, p. 74.
  - 11) 世代現象として明治後期の青年の思想と行動様式を分析する視点は新しいものではない, たとえば, 岡義武「日露戦争後における新しい世代の成長—明治三八—大正三年—」(上・下)『思想』1967年, 2月および3月号では世論レベルでの世代間葛藤と政府にとっての統合問題が整理されている. しかしながら, 煩悶という世代現象を個人の内面に立ち入って検証してはいない.
  - 12) 『還元録』 p. 32.
  - 13) 同上書, p. 33.
  - 14) 同上.
  - 15) E・H・エリクソン著, 小此木啓吾訳編『自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル』誠信書房, 1973年, 第6章参照.
  - 16) K・ケニストン著, 庄司興吉他訳『ヤング・ラディカルズ—青年と歴史—』みすず書房, 1973年, p. 255.
  - 17) 相馬御風「吾等青年の行くべき道」『文章世界』明治43年, 初出. 『相馬御風著作集』別巻1, p. 171.
  - 18) 同上論文, 『著作集』別巻1, p. 172.
  - 19) 『還元録』 p. 43.
  - 20) 「吾等青年の行くべき道」前掲, p. 172.
  - 21) 浅見淵『史伝早稲田文学』新潮社, 1974年, p. 71.
  - 22) 御風は自らの悲痛な心情を, 岩に鼻を打ちつけ大海に出ようとする魚に譬えてこう書いている.  
「けれどもこの魚は歓喜に充ちて, もとあったよりは二重の歓喜に充ちて, 元の大海に還って行く. 海は依然として旧のままの海である. そこで波は岩根との愚かな争ひから得た傷を癒し, 曾て知らなかった歓喜の生を送らうとするのである. その魚が私であり, その大海とは曾て私が住んで居た新人達の所謂衆愚の生活である. 謂ふ所の凡夫の世界である. 謂ふ所の単調無味の生活である.
  - 23) 「吾等青年の行くべき道」前掲, p. 175.
  - 24) 相馬御風「観照の人の生涯」『新潮』明治43年, 初出. 『著作集』別巻1, p. 177.
  - 25) 同上論文, p. 181.
  - 26) 相馬御風「自然主義論発展の経路」『新潮』明治42, 初出. 『著作集』別巻1, p. 195.
  - 27) 相馬御風「正宗白鳥論」『新潮』明治45, 初出. 『著作集』別巻1, p. 58.
  - 28) 相馬御風「自然, 人間, 自己」読売新聞, 明治42年8月28日, 初出. 『著作集』別巻1, p. 200.
  - 29) 相馬御風「自我生活の要求」読売新聞, 大正2年8月24日, 初出, 『著作集』別巻1, pp. 236—237.
  - 30) 相馬御風「凡人生活の福音」『早稲田文学』大正5年, 初出. 『著作集』別巻1, p. 402.
  - 31) 浅見淵, 前掲書, p. 78.
  - 32) 「凡人生活の福音」で御風はこう述べている.  
「世界の改造とか歴史の創造とか云ふ美名の下に, さまざまな意味での闘争が今後ますます激しくなるであらう.」『著作集』別巻1, p. 403.
  - 33) 同上.

- 34) 丸山真男「個人析出のさまざまなパターン」M・B・ジャンセン編，細谷千博編訳『日本における近代化の問題』岩波書店，1968年，所収。
- 35) 同上論文，p. 383.
- 36) 『それから』の中にこんなくだりがある。「そのうえ彼（主人公＝大助：筆者）は，現代の日本に特有なる一種の不安に襲われだした。その不安は人と人の間に信仰がない原因から起こる野蛮程度の現象であった。彼はこの心的現象のためにはなはだしき動揺を感じた。彼は神に信仰を置くことを喜ばぬ人であった。」角川文庫，p. 134より。これのみならず，漱石の描写には，心理学，哲学等から借りた概念によって，操作的に近代人の苦悩を盛り込んだ感がある。
- 37) 久米正雄「私小説と心境小説」『文芸講座』文芸春秋，大正14年，所収。
- 38) 私小説の系譜については，石阪幹将『私小説の理論』八千代出版，1985年が網羅的な収集を行っており，簡便である。
- 39) 臼井吉見『近代文学論争・上』筑摩書房，1975年，pp. 115—164に詳しい。
- 40) 小田切秀雄『日本の近代文学の思想と状況』小田切秀雄著作集，第7巻，法政大学出版局，1970年，p. 43.
- 41) 阿部次郎『三太郎の日記』日本教養全集，第1巻，角川書店，所収，1974年，p. 7.
- 42) 一連の私小説論の系譜のなかでは，小林秀雄『私小説論』昭和10年（『小林秀雄初期文芸論集』岩波文庫，所収）で問題にされている，わが国の私小説作家に社会的自我が欠如しているという指摘は，その社会化という概念はともかく，今一度検討する必要がある。この点を詳説しているものとしては，磯貝英夫「私小説論の系譜—第一期—」『国語と国文学』東京大学国語国文学会，1963年4月特集号が注目される。